

視線を上げて遠くを見よう

参加型システム研究所理事長
神奈川大学名誉教授

橘川 俊忠

混迷の時代へ？

アメリカ合衆国の大統領選挙は、大方の予想に反してトランプ候補の勝利に終わった。その勝利は、EU離脱を選択したイギリスの国民投票の結果以上に世界に衝撃を与えた。どちらの場合も、自国第一主義を掲げ、過去の「栄光」の再現を呼号する勢力が勝利を収めたと言っていいだろう。アラブ中東では、内戦・テロは深刻の度を加え、難民問題に苦しむヨーロッパでは内向きの自国中心主義の右派が勢力を伸ばし、ロシア・中国の大国主義は冷戦を思わせるような国際的緊張を引き起こし、核武装に執着する北朝鮮、大統領のσκヤンダルに揺れる韓国、世界中に沸き起こる新しいエスニック・ナショナリズムの嵐等々、何がどうなっているかをじっくり考える暇もないほど深刻な出来事が相次ぎ、世界はどうなってしまうのだろかという不安ばかりが昂進する。

ひるがえって日本はどうかと言えば、不安定雇用と格差の増大、相次ぐ災害、収束の見通しすら明らかでない福島原発、にもかかわらず原発再稼働を急ぐ政府、沖縄民衆の意思を無視した米軍基地の押しつけ、安保法制の強行、憲法改正の蠢動等、自民党一強体制のもと対決型強権政治の動きはとどまるところを知らないかのようなのである。それに対して、批判機能を果たすべきマスコミは委縮し、野党は迷走し明確な対抗軸を打ち出せない状況が続いている。

世界も日本も、分極化と不安定化の深刻な要因を抱えたまま、とにかく強権の政治に未来を託そうとしているかのようなのである。それは、まるで行く先を見定めず、高速で荒海を突っ走ろうとする船の競争に似ており、衝突という大事故を誘発する危険を生じさせてさえいる。

「失われた十年」の虚構性

このような「混迷の時代」に陥りやすい誤りはいくつもあるが、そのうちの一つは即効性のある対策を求めることである。かつて、バブル経済が崩壊し、経済が低迷期に入った時、「失われた十年」という言葉が流行し、右も左もその言葉に呪縛されているかのような状況が生まれた。グローバルスタンダードの導入、規制緩和が呼号され、「構造改革」の掛け声のもと、戦後

日本を支えてきた中間層の分解が進み、雇用の不安定化と格差の拡大が進行した。一時景気は回復するかに見えたが、再び経済は低迷状態に陥り、「失われた十年」は「失われた二十年」にのび、いまでは「失われた三十年」とすら言われるようになった。

考えてみれば、「失われた十年」で失ったものは、分厚い中間層によって支えられたそれなりに安定した社会ではなかったのか。普通の市民生活において、五十年以前の生活水準に戻ったわけでもないし、まして百年以前の生活に戻ったわけでもない。少なくとも、耐久消費財や通信機器の普及は、以前のどんな社会よりも進んでいる。失われたものがあつたとすれば、それはより大きな利益を求める金儲けのチャンスが減ったということだけではないか。「失われた十年」という言葉は、飽くなき利益増大を求める者達が発した偽りの言葉であつたと言ってもよい。その言葉に踊らされて拙速な「構造改革」が強行され、その結果が今日の「混迷」を招いたのである。

道に迷ったら上に登れ

突然話が違って恐縮だが、登山家の鉄則の一つとして「道に迷ったら上に登れ」という言葉がある。山で道に迷った時、得てして下に降りたくなるものだが、谷筋に降りてしまうと、視野は狭まり、曲がりくねった谷筋では方向感覚も失われ、崖に転落する危険も増す。だから上に登って、見通しの良いところで方向を確かめることが必要なのである。この鉄則は、どうやら登山の場合だけに限られないようである。

当面の景気対策は、株価の変動に一喜一憂する「投資家」の要望に応えるものかもしれないが、かえって本当の意味での構造的問題を悪化させるだけであろう。まさに、谷に下るようなものである。少子高齢化、環境問題、財政赤字、格差社会どれも長期的展望に立った対応が求められる重大な問題である。今こそ、高みに登り、過去と未来を遠く見通し、現在の位置を見定める時である。「メイク アメリカ グレート アゲイン」のような「夢よもう一度」式の発想で不満のほけ口を求めても、かつての悪夢の時代の再現になりかねないからである。

(きつかわ としただ)